

潜伏キリシタン・カトリックのみる自宗教と異国（江戸後期・明治初期）

パリ・ディドロ大学 PD、コレージュ・ド・フランス研究助手
マルタン・ノゲラ・ラモス

禁教令・排耶書においてキリシタン・カトリックは日本の慣習・信仰を乱す異国の宗教として紹介されている。十九世紀のヨーロッパによるアジアの植民地化で、そうした見解が中国・韓国・東南アジアにおいても広まり、カトリック信徒はたびたび「国の敵」として見なされていた。しかしカトリック信徒自身がどのように自らの信仰をみていたのかに関しては実は、従来の研究でほとんど取り上げられた事のない課題である。土着でない信仰としてみていたのだろうか。

今回は、この課題について近世後期～明治初期日本のカトリック・潜伏キリシタンを対象として発表する。禁教政策で、カトリックの司祭・宣教師が徐々にいなくなるなか、信仰を放棄するキリシタンが多かったが、一部は表面上仏教徒なり、密にキリシタン信仰を守ろうとした。このキリシタンは潜伏キリシタンとよばれている。十七世紀中期-1865年の間、中世後期・近世初期のキリシタン・カトリックの子孫の一部は潜伏形態で信仰活動を維持した。幕末期、パリ外国宣教会士は来日し、1865年長崎の大浦天主堂でプチジャンという宣教師は潜伏キリシタンを発見する。それ以来、潜伏キリシタンの中に改宗過程が開始する。しかし、浦上四番崩れが発生したことにより各地に取締・弾圧がある。明治六年以降は禁教高札が撤廃され、黙認時代となる。しかし、すべての潜伏キリシタンがカトリックとなったわけではなく、多くは宣教師を認めなかったのである。したがって、カトリック信徒・潜伏キリシタンが共存することとなる。

今回は、1865年の宣教師との接触によりカトリックとなった潜伏キリシタンの信仰意識の変化について述べたい。本発表において次の四つの課題を明らかにすることを目的とした。

①潜伏キリシタン組織の多様性・系統について

- 潜伏キリシタンの中に四つの系統が存在→外海・浦上系/生月・平戸系/天草系/今村系（久留米藩）
- 潜伏キリシタンの間でも祈り方や典礼暦の差異により異宗教として認識（儀礼中心主義）
- それぞれの潜伏キリシタンは自らの信仰・習慣が特定の村のものでなく、さらに広域的なものであると意識。

②宣教師再渡来以前の潜伏キリシタンの異国意識と信仰起源

次の史料を紹介

→近世後期の為政者は異端的宗教活動を含む潜伏キリシタンを対象とする取り調べを実行。それらの事件に関して残る多くの記録。

→『天地始之事』という浦上・外海系潜伏キリシタンの書物。

③潜伏キリシタンの信仰起源および宣教師の異国性

- 潜伏キリシタンは宣教師の出身地に強い興味を持つ。
- 潜伏キリシタンにとって重要なのはカトリック教理の異国性でなく、先祖の伝承・習慣と宣教師の教理・実践の類似性であり。改宗を通じて、先祖信仰の本来の意味を探索。

④幕府・明治政府の弾圧とカトリックの信仰起源の意識の変化をめぐって

- 明治以降、為政者は改宗者（カトリック信徒）と異国の脅威の関係を指摘。
- 明治政府の宗教対策に対して、改宗者は徐々にカトリック信仰の普遍性に重点を置くこと。